

追悼文(太田さんを偲ぶ)

横尾 敬介(前 留学生支援企業協力推進協会 代表理事)

太田君が、「私に会いたい。どうしても話をしなければならぬことがありますので」と急な連絡が入り、急遽、二人だけで会ったのが、2019年9月のことである。「肝臓がんが進行しており、他の臓器への転移もある。担当医からは、余命3か月～6か月と告知されている。家族と相談の上、手術はせず、緩和ケアを受けるつもりです。」との説明を受けた。私は、驚愕すると同時に、太田君の冷静で、しっかりした口調で語る姿に、敬意にも似た感動が私の胸に溢れてきたことを覚えている。

太田君と知り合ったのは、2015年の春、私が、公益社団法人 経済同友会 副代表幹事・専務理事に就任するとほぼ同時期に、お役目として、公益財団法人 留学生支援企業協力推進協会 代表理事に就任した際、まさに太田君が同協会を支える立場の専務理事として、私を迎えてくれた縁である。

初対面で「声が大きく、はっきり物を言う人だな」との印象を強く持ったが、その後、協会の仕事を通じて、会議、面談、打合せ、パーティー等々の機会を得、太田君の人となりに接してみると、私の印象は大きく変わっていくことになる。親愛の情を込めて言えば、「噛めば噛むほど味が出る」タイプの人。

お付き合いをしていく内に、協会に対しても、留学生一人一人に対しても、かなりの情熱を持って、取り組んでいる人だなあと、感じるようになりました。一方で、留学生、事務局職員、とりわけ、留学生に対しては、何かあれば、親身になって相談にのっており、また、時には、顔の浮かない留学生にやさしく語りかけたりして、まるで自分事のようにサポートしていた。

ある時、太田君に「君は、なぜ留学生達にそこまでするのか」と、尋ねたことがある。太田君は、少し照れた顔して、こう答えた。「彼ら、彼女らは、当たり前ですが、言葉は勿論のこと、価値観、考え方、慣習、文化等々、全く環境の異なる国で、チョットしたことが原因で、トラブルを起こすこともあるだろうし、困り果てることもあると思う。私は、留学生達みんなが、日本を好きになり、出来れば、日本で就職し、日本にこれからも住んでほしいと、願っています。たとえ母国へ帰ったとしても、私達のことを、日本のことを思い出してほしいし、日本のファンであり続けてほしいと思います。だから、協会のできることを、私自身ができることを、すべてをしてやりたいと思うのです。」と。

昨年の秋、太田君の病、それに対する方針等を語る気丈な姿勢と留学生達に対する情熱と優しさに触れていただけに、遂に、今年2月、悲報に接し、痛惜の念でいっぱいでした。

留学生達にとって、親代わりであり、兄代わりでもあった太田君、早過ぎる旅立ちで、ご家族の悲しみ、落胆は、如何ばかりかとお察し申し上げます。でも、きっと、旅先から、これからも、ご家族のことは勿論のこと、留学生達へ、持ち前の情熱とやさしさを心に、見守ってくれていると、信じています。

ご冥福を心からお祈り申し上げます。